

『#城砦（上）（下）』（A. J. クローニン著）を読んでみた。著者は1914年グラスゴー大学で医学を学ぶための奨学金を得た。首席で大学を卒業。その後、南部ウェールズの鉱山町で開業する。この時のことを『城砦』に描いた。著者は私より50年早く生まれている。

50年前に私が自治医科大学に入学して、なぜか最初に読んだ小説が『城砦』である。そして感動して母校の後輩に手紙を認めたことを思い出す。その『城砦』を夏川草介氏（「神様のカルテ」シリーズの著者）が新たに訳したというので読んでみた。

主人公のAと私の人生が似ているのである。医師の仕事に情熱を燃やす若き医師Aが赴任した先の指導医は脳卒中で寝てきりであった。独学で突き進むしかないのだ。

私の場合、卒後3年目の後期研修病院といわれたのは原発の町の病院であった。そこには3人の内科医がいた。副院長を兼ねる医師はカルテにドイツ語で記載し、口頭で指示を出していた。私が居た3年間のうちに秘書の女性と駆け落ちしていなくなった。内科医長は黄疸であろうと何であろうと血圧だけを測って病室を出入りする人であった。最後の一人は高齢の台湾出身の医師で、心電図を逆さにして読んでいた。彼が処方した多量の服薬でよく患者が倒れた。外科医は勤務時間中の救急患者は断るが、時間外の救急患者は別に手当が出るので診るといった人だった。また勤務時間中は居ないのに、夕方から出勤して時間外手当をせしめている医師もいた。40年前の自治医大卒業生の研修とはこんな状況であった。

本書は、主人公の若き医師Aが様々な苦難に立ち向かう半生を描いたものである。ある時は、医療制度に立ち向かい、ある時は、富や名声への渴望という自らの欲望に足をさらわれそうになりながら、希望の灯を絶やさない心の軌跡が描かれている。Aは「何のために生きるのか？」「何のために働くのか？」そんな人生の難問に出逢う。100年前の英国で遭遇する苦難や人生の落とし穴。いつの時代でも遭遇するのだ。

Aは奨学金を返すために鉱山の田舎町へ赴任する。理想が高く意欲は旺盛であるが、経験がない。運の悪いことに指導医は再起不能の寝たきりである。腸チフスも他院に勤める医師のつぶやきで思いつく（危うく見逃し）。衛生環境を

よくするために行政官に訴えても埒が明かず、下水道を爆破するという快挙に  
でる。そんな中で素晴らしい伴侶Cに出会う（こんにカネに惑わされず生きが  
いを夫と追求する人は滅多にいないであろう）。貧乏でも幸せの日々。そして  
向上心も旺盛で、忙しい日常診療の合間に時間を捻出して勉学に励み、専門医  
の資格も学位も取得する。しかし、その後付き合った医師仲間が悪いのか、お  
金儲けに走るようになり、Cとの仲も険悪となる（夫がカネを儲けると意気消  
沈する妻）。

そんな日々が続く中、外科手術で自分を頼ってきた患者が亡くなり、初心に帰  
る契機になる。医院を売却して、志の高い二人の医師と理想の医療を目指そう  
としたとき、Aに不幸が襲う。さらに追い打ちをかけるように、医師免許剥奪  
の裁判に訴えられる。そこでの陳実がかっこいいのだ。

果たして、医師免許は守られるのか。再び、理想の医療を仲間とともに目指せ  
るのか。

本書を読んで、高く志を持ち続けるには3つのことが必要であると痛感した。  
よき友を持つこと、よき伴侶をもつこと、そしてよき師を持つことである。  
50年前の学生時代に私は本書のどこに感銘を受けたのか思い出せないが、現在  
に生きる若い医師が読んで感動する本であることは間違いない。